

2016年2月21日 「神氏族メシヤ出発決断式のみ言」 刑部徹地区長

<訓読のみ言>

『平和を愛する世界人として』

第四章 私たちの舞台が世界である理由 アメリカに行くための最後の飛行機

私たちは東欧の共産国家で行う宣教活動を「ナビ（蝶）作戦」と呼びました。幼虫がさなぎの期間を経たのち羽根を付けた蝶になる姿が、共産国家で苦難に耐えなければならない地下宣教活動に似ていることから、そう名付けたのです。蝶が幼虫から脱皮していくのは、苦勞が多く孤独な過程ですが、成虫になるとどこへでも力強く飛んでいくことができます。同様に、地下宣教も、共産世界さえ崩れれば、羽根を付けてひらひらと飛んでいくものでした。一九五九年初めに渡米した金永雲宣教師は、北米大陸のすべての大学を回って神のみ言を伝えましたが、その中でカリフォルニア大学バークレー校に留学していたドイツ人のピーター・コッホは、新しい真理によって伝道され、学業を中断して、オランダのロッテルダムに行ってヨーロッパ伝道を始めました。日本でも、中国をはじめとするアジア圏の共産国家に宣教師を送り出しました。きちんとした派遣礼拝を一度もできずに宣教師を死地に送り出す私の心は、甲寺（カプサ）の裏の松林で、崔奉春（チェボンチュン）を日本に送り出した時とさして変わりはありませんでした。子供が打たれるのを見るのは、かえって自分が打たれるよりも残酷です。いっそのこと私が宣教師になって行けばよいものを、信徒を監視と処刑の地に送り出しながら、私の心は泣き続けていました。宣教師を送り出した後、私はほぼすべての時間を祈りに費やしました。彼らの命のために私にできることは、心を尽くして祈りを捧げることだけでした。共産圏での宣教は、見つければすぐに共産党に襟首をつかまれて引っ張られていく、危険この上ないものでした。共産圏の宣教に行く信徒は、親に目的さえ知らせることができずに出発しました。共産主義の恐ろしさをよく知る親たちが、最愛の息子・娘が死地に入っていくのを許すはずがなかったからです。ソ連に派遣されたクント・プオルチョは、国家保安委員会（KGB）に見つかって、国外追放されました。チャウシェスクの独裁が極に達していたルーマニアでは、秘密警察のセクリタテアに尾行され、電話を盗聴されることが頻繁にありました。一言で言って、ライオンのいる洞穴に飛び込むようなものでした。それでも、共産国家に潜入する宣教師の数は日増しに増えていきました。その頃、一九七三年のことです。チェコスロバキアで、宣教師を筆頭に信徒三十人以上が一度に検挙されるという惨い（むごい）事件が起きました。マリア・ジブナは冷たい監房の中で、二十四歳という花の盛りを迎えようかという年頃で命を失い、共産国家で宣教中に落命した最初の殉教者となりました。翌年、もう一人がやはり監獄で命を失いました。知らせを聞いた私は、全身が硬直しました。話すこと、食べることはもちろん、祈ることさえできず、石の塊になったように座り込んでいました。我らが私に出会っていなければ、私が伝えるみ言を聞いていなければ、そのように寒くて孤独な監獄に行くこともなく、そこで死ぬこともなかったはずなのに・・・。彼らは私の代わりに苦痛を受けて死んだのです。「彼らの命と

交換した私の命は、それだけの価値のあるものなのか。彼らは私の代わりに共産圏宣教の重荷を背負ってくれた。その負債を、私はどうやって返せばよいのか」私はますます言葉を失っていきました。深い水の中に浸かっているように、際限のない悲しみに落ちていきました。その時、私の目の前にマリア・ジブナが黄色い蝶になって現れました。チェコスロバキアの冷たい監獄を抜け出した黄色い蝶は、力を失って座り込んでいる私に向かって、力を出して立ちなさいとでも言うように、羽根をひらひらさせました。彼女は、命をかけた宣教を通して、本当に幼虫から脱皮して蝶になっていたのです。極限状況で宣教する信徒たちは、ひときわ多く夢や幻想を通して啓示を受けました。八方ふさがりの状況では、誰とも連絡が取れないので、神が啓示を通して進む道を知らせてくれました。就寝中に「すぐに起きてそこから移動しなさい」と夢で教えられ、跳ね起きてその場を離れるやいなや、秘密警察が踏み込んできた、ということもあります。間一髪で命拾いするような出来事が、一度や二度ではありませんでした。また、一度も直接会ったことがないのに、夢に私が現れて、宣教のやり方を教えたこともあったそうです。信徒たちは、私に会うやいなや、「ああ、あの時、夢でお目にかかった先生に間違いありません」と喜びの声を上げるのでした。